

シリーズ／レポート'82原子力のこころが知りたい⑥

盛り上がる反核運動の中で 原子力の平和利用をどのような に考えるべきなのだろうか？

昨年から今年にかけて、反核運動が世界的規模で燃え上がりました。日本も世界で唯一の被爆国として、この運動に大きな役割を果たしました。ただ、「反核」という場合、平和利用を含むすべての核への反対なのか、核兵器の禁止に重点が置かれているのか、ちよつと気になるところです。今回は、原子力の利用、特にその軍事利用と平和利用のかかり方について考えてみました。

ヨーロッパの片隅から起こった、
「反核」の声は、日本で大きな運
動に盛り上がった

「反核」の声は、昨年の秋、西ヨーロッパで
わきあがりました。東側と西側が陸つづき
で鋭くにらみ合っているこの地域は、当然
のことながら、多数の核兵器が配備されて
います。政治評論家の岩見隆夫さんにいわ
せれば、

「西ヨーロッパの人たちは、核兵器が密集
している中で暮らしているんです。核の恐
怖を常日ごろ、それこそ肌で感じている。
だから「反核」の叫びは生活に直接かわり
のある切実な要求なんです」

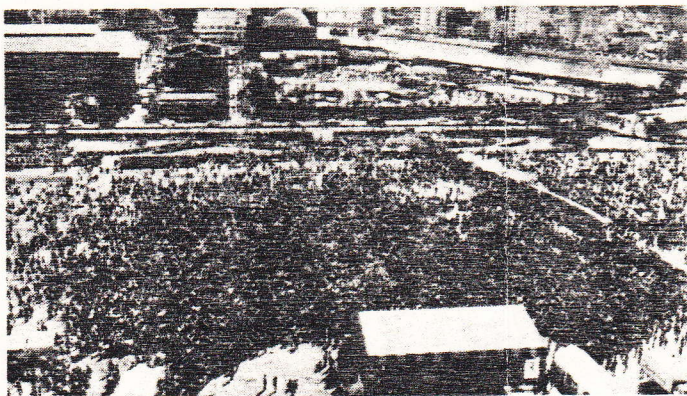
現在、核保有国に貯蔵されている核兵器
の量は、地球上の人間を二回以上も殺せる
ほどなのだそうです。となれば、その切実

感は西ヨーロッパの人々ばかりでなく、す
べての人間が抱くほどに普遍的なものであ
るにちがいない、この運動はたちまち国境
を越え人種の違いを超えて、数多くの人々
の共感を得るところとなりました。

日本もその例外ではありません。いや、む
しろ日本においてこの運動は最も大きな盛
り上がりを見せたといつていいでしょう。

では、この運動と核エネルギーの平和利
用のかかりはどうなのでしょう？ 運動
に関心を持っている人たちの意見は、核兵
器の禁止ほどには共通してはいないよう
です。

「核兵器を作るためにどれほどの技術とお
金が使われたことか。核エネルギーは、本
来、人間の英知によって生み出された貴重
な財産なんです。この財産が悪用されるこ
とに問題があるんで、核エネルギーを生み



広島市の反核集会。

出した同じ英知でもって、この財産をもつ
ば人間の利益のために生かすことが、私
たちに課せられた使命なんじゃないでしょ
うか。核兵器製造に浪費された技術とお金
は、そのためにこそ使わねばなりません。『反核』
ということでの可能性までつぶしちゃい

けないと思うんです」

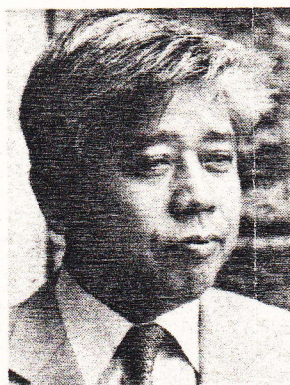
と語るのは、この運動に署名した山野秀
子さん（主婦）です。

「フォークランドや中近東で起こっている
ことを考えると、何かの拍子で日本で戦争
が起こってもおかしくありません。できたら
原発もやめてほしいですね」

と不安顔で語るのは、もう一人の主婦、
田中千鶴子さん。

これに対して、前出の岩見隆夫さんは、
「核兵器の禁止や廃絶に真つ向から反対す
る日本人はまずいないんじゃないでしょう
か。これについては、はっきりと国民的な
コンセンサスがある。」

ただ、反核という意識はあっても、日本
は現実にはアメリカの核の傘に入っているわ



岩見隆夫さん

けですね。この状態について、だから、平
和が維持されているんだという見方もあれ
ば、いや、そうだからこそ平和が脅かされ
ているんだという意見もある。国民のだれ
もが、平和を守るために何が「絶対」なの
か、よくわからないでいるんです。原発に
についても同じことがいえるわけで、現実
には、原子力発電は電力の二〇％近くをす
でにまかなっている。でも、これから先、原
子力開発を進めるべきかどうか、国民の合
意が十分ではない。黒でも白でもない、灰
色の領域で判断しかねているという状態な
んです。そういう意味で、いま私たちにい

ちばん必要なのは、黒か白か二者択一ができるだけの知識、判断材料を得ることではないでしょうか」

「平和利用に徹するといってもどこかムリがあるんじゃないでしょうか？」

では、判断材料にはどんなものがあるの

でしょうか。たとえば、有識者の意見、これもそのひとつです。

女性の立場から、反核運動の先頭に立って活躍してきた評論家の吉武輝子さんは、「現に外国では、原発から出るプルトニウムから核兵器が作られています。そういう事実があって、平和利用に徹するというのはどこかムリがあるんじゃないでしょうか？ 特に現在の科学には確固とした哲学



核兵器の廃絶は私たち共通の願いです。原子力を兵器としてでなく、私たちの生活に豊かさをもたらすエネルギーとして利用すること——それについては、私たち一人一人が真剣に考えるべき問題です。



吉武輝子さん

がありません。哲学がないと、科学が一人歩きを始めることは、いままでの歴史の中で、何度もみえています。平和利用というのは、終始一貫して平和に徹することで、初めは処女のごとく、終わりは脱兎のごとしというのであってはなりません。

ほんとうに平和に徹するとすれば、もともとからなくす、つまり、すべての核をなくすことがいちばんいいんです」

と、核に軍事利用も平和利用も区別はないと、手厳しい意見を述べます。

「日本は、国内の法律や国際条約で、核の軍事への転用は、絶対にできないのです」

これに対して、日本原子力産業会議の専務理事、森一久さんは、まず、

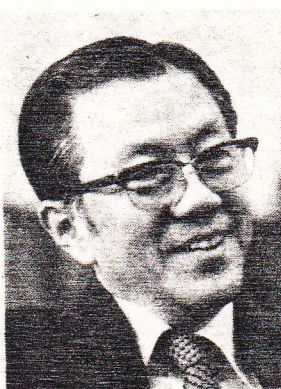
「私たちが核の軍事利用には反対です。率先して核兵器の拡大を阻止したいと思っています。核兵器の恐ろしさをわれとわが身で知っているのは世界で日本人だけです。国民のコンセンサスがなによりも必要な原子力開発で、このことを無視しては何もできません」

と、平和に徹した原子力開発の必要性を強調します。そして、

「こうした私たちの決意は、単に情動的なものではありません。わが国では、平和主義の憲法や非核三原則（核兵器は、持た

ず、作らず、持ち込まず）が国の方針として確立しています。それから、原子力開発を進めていくうえで、そのやり方を具体的に規制している法律（原子力基本法というんですが）で、原子力開発は平和利用に厳しく限定されているのです。

また、わが国は国際的にも核兵器の不拡散に関する条約に加盟し、核兵器を持つたたり、外国が核兵器を製造することに援助したりしない約束をしています。この条約によって、原子力が平和利用から軍事利用に転用されることを防止するために、国際原子力機関の査察を受け入れています。ですから、この査察を受け入れていると



森 一久さん

いうことは、国際的にもわが国の原子力開発が平和目的のためであることを明示しているのです。また、戦争になると原発が攻撃目標になるという話をよく聞きますが、そういうことは禁止しようという機運が、国連を中心に取りつつあります」

と、国内的にも国際的にも、日本が原子力を軍事的に利用することは不可能なのだと思います。

*

核をめぐる是非論は、観点を変えれば、まだほかにもたくさんあるでしょう。ただ、少なくとも、反核運動が盛り上がったこの機会に、私たち一人一人が、この問題を真剣に考えてみる必要があるそうです。